

日本学 術会議 <h1>中国・四国地区ニュース</h1>	No. 53 2022. 3	発行 日本学術会議 中国・四国地区会議
---------------------------------	-------------------	---------------------------

## 記 事

### 日本学術会議の現状報告と地区活動のご紹介

1 頁

#### 【寄稿】

新型コロナウイルス感染症を取り巻く専門分野研究の潮流

3 頁

コロナ禍と考古学

5 頁

#### 【公開シンポジウム報告】

「ジェンダード・イノベーション ～一人ひとりが主役の研究開発が新しい未来を拓く～」を、完全オンラインで開催

6 頁

会員・連携会員一覧（中国・四国地区）

10 頁

地区会議事務局からのお知らせ

12 頁

## 日本学術会議の現状報告と地区活動のご紹介

日本学術会議中国・四国地区会議 代表幹事

第三部会員（広島大学 学長特命補佐（研究人材育成担当））

相田 美砂子

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大は、まだ、先の見えない状況にあり、社会活動への様々な制限、それに起因する様々な影響が続いています。小中高や大学においても、感染拡大防止を最優先とする対応が続いており、児童・生徒・学生たちの活動に大きな影響が出ています。保育園などの閉室も相次いでおり、育児をしながらの社会人の方々への影響も計り知れません。

このようなコロナ禍のなかで、テレワークの実施や、会議やシンポジウム等のオンライン開催が容易となったことは、せめてもの救い、となっていることだろうと思います。日本学術会議が主催する、さまざまな公開シンポジウム等も、最近では、オンライン開催として準備しているものがほとんどですので、わざわざ東京に行かなくても、地方に居ながらにして、多くのシンポジウムに参加することができるようになりました。対面での出席の方が良い面は多くありますが、遠方のため全く参加できない、よりは、オンライン参加が可能であることの方がよほど良いと思います。みなさまも、日本学術会議からのアナウンスを活用して、ご関心のあるシンポジウムに、ぜひ、ご参加ください。日本学術会議からは、毎週金曜日の 15 時に、「日本学術会議ニュース・メール」がメール発信されています。お知らせの内容は、日本学術会議の HP にも掲載[1]されています。また、一般公開イベントについては、こちら[2]に一覧がありますので、ご参照ください。

日本学術会議 第 25 期は、2020 年 10 月に開始後、約 1 年半が経過しました。この間、日本学術会議は、梶田 隆章 会長を中心に、改革に取り組んできました。2021 年 4 月 22 日には、1)国際活動の強化、2)意思の表出と科学的助言機能の強化、3)対話を通じた情報発信力の強化、4)会員選考プロセスの透明性の向上、5)事務局機能の強化、の 5 項目の改革について、「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」として公表されています[3]。これに関連した Q & A も公開されていますので、あわせてご参照ください[4]。その具体的な取組の一環として、新しく、「科学的助言等対応委員会」[3]が設置され、意思の表出フローチャートも大きく変わりました。提言などを準備している会員・連携会員のみなさまは、ご注意ください。詳細は、[5]をご参照ください。

日本学術会議の会員（定員 210 名）及び連携会員（約 2000 名）の任期は 2 期 6 年です。次期の会員候補者選考の方針についても検討が加えられています。今年 10 月の総会までには、さまざまな方面への意見聴取を経て、方針が決定されます。

第 25 期の日本学術会議中国・四国地区は、会員 7 名（女性 2 名、男性 5 名）、連携会員 105 名（女性 29 名、男性 76 名）、計 112 名です（2022 年 2 月現在）。県別の会員／連携会員の一覧は、本ニュースの pp. 10～11 をご参照ください。地区会議には、それぞれの地区の運営及び活動について審議・決定するため、地区会議運営協議会が置かれています。第 25 期運営協議会委員についても、県別の会員／連携会員の一覧をご参照ください。

中国・四国地区会議のコアな活動は、年 1 回の公開学術講演会（あるいは、公開シンポジウム）の開催と、この地区ニュースの発行です。2021 年度の公開シンポジウムは、「ジェンダード・イノベーション ～一人ひとりが主役の研究開発が新しい未来を拓く～」(広島大学、2021 年 8 月 18 日) です。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため完全オンライン開催とし、多くのオンライン参加者がありました。詳細は本地区ニュースの報告 (pp. 6～9) をご参照ください。

中国・四国地区の地区会議運営協議会は、コロナ禍の前は対面での開催でしたが、最近では Zoom でのオンライン開催です。中国・四国地区は、交通の便が悪く、移動に時間がかかるため、オンライン開催のメリットが大きいことを体感しています。

[1] ニュース・メール (日本学術会議)

<https://www.scj.go.jp/ja/other/news/index.html>

[2] 一般公開イベント (日本学術会議)

<https://www.scj.go.jp/ja/event/index.html>

[3] 「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」(日本学術会議)(2021年4月22日)

<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-s182-2.pdf>

[4] 「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」Q&A

<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/qa/index.html>

[5] 科学的助言等対応委員会 (日本学術会議)

<https://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/jogen/index.html>

## 新型コロナウイルス感染症を取り巻く専門分野研究の潮流

日本学術会議

連携会員 (徳島大学大学院医歯薬学研究部教授)

石丸 直澄

日本学術会議中国・四国地区会議 運営協議会委員

第二部会員 (徳島大学大学院医歯薬学研究部教授)

市川 哲雄

「口角泡を飛ばす」議論の場が少なくなつて2年余り経つ。マスク着用、ソーシャルディスタンス、ウェブ会議、ウェビナー、懇親会なしなど、ウイルスから逃れるためにアカデミア活動も大きく変化した。一方で、人類の困難をサイエンスで乗り切るために、多様な専門分野で新型コロナウイルスを取り巻く様々な研究が進展している。そんな中で、新型コロナウイルス感染症と唾液との関係性に着目した研究を紹介する。

新型コロナウイルス感染の判定は、当初、咽頭粘膜の拭い液を用いてウイルス遺伝子の増幅によるPCR法が実施されていたが、被験者との接触、手技の煩雑性、検査実施者の確保、被験者の痛みなどの観点から、現在では唾液中に存在するウイルス遺伝子の増幅によるPCR法が主流になってきた。唾液採取による検査方法は、咽頭拭い液に比べて検出感度に大きな差がない上に、被験者自らが簡単に採取できる点、郵送などを応用すれば接触なく検査が可能である点が大きなメリットである[1]。

唾液中には、種々の酵素、抗菌物質、免疫関連タンパクなどに加え、口腔粘膜に存在する無数の微生物、その微生物に由来するタンパクや核酸など多彩な物質が存在している。また、解剖学的に口腔との連続性を有している鼻腔・咽頭に感染した微生物由来の物質も唾液中に含まれることが知られている。加えて、血中の種々の物質が唾液中でも検出されることから、唾液を用いた臨床検査の有用性が報告されてきた[2]。さらに、唾液中に含ま

れる遺伝子を用いた犯罪・身元調査の有効性はすでに知られている[3]。最近では、唾液中に含まれる遺伝子産物・断片を網羅的に解析することで、腫瘍をはじめ様々な疾患の診断などの臨床応用に向けた研究が進んでいる[4]。

2021年5月にアメリカの研究者らによって発表された論文では、唾液を分泌する臓器である唾液腺の細胞に新型コロナウイルスが感染することが明らかになった[5]。さらに、新型コロナウイルスの感染の足場となる受容体の一つが唾液腺細胞に存在することが判明した[6]。新型コロナウイルスの標的臓器は肺が中心であり、ウイルス性肺炎による呼吸不全が重篤な病態をもたらすことが知られているが、唾液腺細胞への感染によって、唾液中にウイルス粒子が放出され、呼吸器に感染するリスクや唾液を介して他人に感染を広げてしまう可能性がある。高齢者や寝たきりの患者などの誤嚥性肺炎が新型コロナウイルスの呼吸器症状を重篤化してしまうことも指摘されている[7]。

ウイルスにはその種類によってどの臓器を好んで感染するかが決まっており、「向性：Tropism」といわれている。自身で遺伝子の増幅ができないウイルスの生き残り戦略として、ヒトなどの生物の遺伝子にウイルス遺伝子を潜り込ませて、ウイルスの子孫を増やしてきた。ウイルスにとってはヒトの体は、様々な環境からのストレスを回避できる居心地の良い場所なのかもしれない。人間にとってはたまったものではないが、唾液腺に感染するウイルスは多数知られており、例えば、おたふく風邪で知られるムンプスウイルスは唾液腺の一つである耳下腺に感染することで、流行性耳下腺炎が発症する。ウイルスが生き延びるために唾液腺に感染し、唾液を介して消化管、呼吸器など全身にウイルスを動員できるシステムは、極めて秀逸な生存戦略と言わざるを得ない。

微生物との戦いは、生体の免疫反応だけでなく、経済、社会性などにも及び、コロナ禍と呼ばれる。口腔科学・歯学領域でも、長い自粛生活による食生活などの生活習慣の乱れ、感染を恐れての歯科受診の敬遠、コミュニケーションの低下、長時間のマスク着用などが口腔環境に悪影響を及ぼすことが指摘されている[8]。その影響も今後長期間に及ぶと考えられる。微生物と生体との戦いは、ワクチン、新薬の開発が中心であるのはいうまでもないが、人体の入り口である口腔、鼻腔粘膜を健全な状態に維持することが、感染予防に極めて重要である。唾液や鼻汁は粘膜環境を整えてくれる重要な分泌物である一方で、飛沫・経口感染の媒体となってしまう。生物は絶えず進化を続けており、ウイルスは自身の遺伝子の目まぐるしい変異を通してより環境に適応した状態で生存しようとしている。当初報告された新型コロナウイルスは遺伝子変異を繰り返して、現在の変異株とは似て非なるものになってしまった。おそらく、これからも新興感染症は次々に人間を襲ってくるものと考えられる。現実味のなかった「パンデミック」が、世界を席卷している現状を打破するために、それぞれの専門分野での研究から叡智を結集する必要があるのだろう。

[1] 厚生労働省 唾液を用いた PCR 検査の導入について

[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_11636.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_11636.html) (2020年6月)

[2] Fernandes LL, et al. J Dent Res. 99:1435-1443, 2020.

[3] Pandeshwar P, et al. J Forensic Leg Med. 22:45-50, 2014.

- [4] Siravegna G, et al. Nat Rev Clin Oncol. 14(9):531-548, 2017.
- [5] Huang N, et al. Nat Med. 27(5):892-903, 2021.
- [6] Usami Y, et al. Oral Sci Int. doi: 10.1002/csi2.1085, 2021
- [7] Khiabani K, et al. Am J Infect Control. 49(9):1165-1176, 2021.
- [8] 日本歯科医師会 新型コロナウイルス感染症について  
<https://www.jda.or.jp/corona/> (2020年2月)

## コロナ禍と考古学

日本学会議

連携会員 (徳島文理大学文学部教授)

大久保 徹也

正直なところ今から2年前、2020年の1、2月頃はまだ漠然とした不安を抱く程度だったが、3月以降それが現実のものとなり、ほとんど2ヶ年の間、波動的な感染拡大に応じる形で様々に行動が規制されてきた。この間の困惑と焦慮はあらゆる分野に通じるが、ここでは専攻する考古学分野に即して、あらためて感じ、考えたことに触れておきたい。なお筆者の勤務地は今まで感染拡大は緩やかで、研究活動上の制約は相対的に限定的であったと思われるが、“それでもやはり”というのが正直な感想である。

考古学は、一言でいえば人間活動の多様な物質的痕跡を素材として過去社会を復元し、比較する。だから研究を進める上で現物資料を観察することの意義は大きい。大地に作り付けられた不動産的な考古資料-古墳や集落跡などの各種遺跡-はもちろん現地に出かけなければ、発掘調査を含めた観察をおこなうことはできない。遺跡から取り出した動産的な資料-土器などの遺物類-もまた、文化財管理の観点からそれらを収蔵機関の外に持ち出すにはどうしても手続きが繁多となるし、そもそもその膨大な資料の移動には限界がある。やはり各収蔵機関を訪れ、そこで細かな観察を重ねることが必要になる。この間、どうしても大きく制約を受けざるを得なかった。

これまで蓄積されてきた二次的資料、つまり既往調査記録-写真や図化資料-および観察所見=調査報告が資料の実地観察を補足する重要な役割を果たす。近年急速に進捗した二次的資料のデジタル化は活用の利便性を高めている。とはいえ、現地に立って周辺の諸環境の中で遺跡を捉え直し、あるいは実際に遺物を手に取りその質感を味わいつつ実物を観察することは研究の出発点であり考古学の根幹である。二次的資料は実地観察で得た感触と所見を豊かに発展させる上で重要だが、あくまで実地観察と併用することで効果を発揮するものだ。

むろん実地観察に終始するばかりではなく、実地観察を起点として、観察所見の分析や比較検討に進むわけだが、そこから必要に応じて実地観察に回帰する、あるいは両者を自在に往還することで研究の深化を図った経験は多いだろう。だから起点に対する制約は研

究総体に影響してしまう。考古資料-遺跡・遺物-の实地観察に始まる考古学研究ではこうした面が強い。

相対的に影響が軽微な地域に居て、かつ現在の研究テーマとの関係もあって筆者個人では研究上の制約はまだしも限定的だと感じるが、主たる研究拠点と研究テーマ如何では、影響ははるかに甚大なものとなる。

それなりに实地観察の経験を蓄積した世代ではまだしも、初めて本格的に考古学に接する学部学生や本格的な研究を始める大学院生にとって、实地観察の機会が縮減してしまうことは致命的ともいえる。筆者自身、個人研究はともかくも学生と共に現地に赴き、一緒に資料に直接触れる機会が大きく減った。すでに様々な制約は2ヶ年に及ぶので、学部の主たる専門教育の期間や大学院博士前期課程の全体をこの制約の下で過ごすこととなった世代が現実に発生している。

また实地観察の機会と同じように、対面して討議を重ねる機会も大幅に減ったことも大きな痛手である。やはりまだリモート形式と対面型式の質的格差を感じざるを得ない。筆者が参加したある共同研究では最終年度がコロナ禍と重なり、その影響は大きかった。共同研究の重要な局面において、五感を駆使して資料を前に、対話を重ねるような討議の迫力を、リモート形式で再現することはまだ難しく感じた。長年慣れ親しんできた少人数で交わす“熱い”討議のメリットがそこでは希釈されてしまう。この間、度々リモート形式で代替せざるを得なかった演習科目などにも全くこのことは通じるだろう。

今は「冬来たりなば・・・」の心境で、コロナ禍の終熄を待つしかない。当たり前すぎて却って強く意識することが少なくなっていたかもしれない实地観察と対面討議の意義をこの機会に今更ながら実感することとなった日々でもあった。

振り返れば、大学教育をとりまく種々の複合的な要因—そこには学生の経済的な厳しさも含まれるだろう—によって、コロナ禍以前からじわじわと、实地観察に十分な時間を費やす余裕が失われつつあったかもしれない。ひょっとすると、それゆえにコロナ禍の行動制限に移行しやすかった面があったのかもしれない。反省を込めつつ、最近はこんな思いが去来する。

## 日本学術会議公開シンポジウム報告

公開シンポジウム「ジェンダード・イノベーション ～一人ひとりが主役の  
研究開発が新しい未来を拓く～」を、完全オンラインで開催

日本学術会議中国・四国地区会議 代表幹事

第三部会員（広島大学 学長特命補佐（研究人材育成担当））

相田 美砂子

中国・四国地区にある多くの大学や高専では、近隣の企業等とも協力して、男女共同参画推進や女性研究者支援の取組を進めている。その取組を通して、次世代の育成と構成員

の意識啓発に取り組んできている。ジェンダード・イノベーションは、科学や技術、政策に性差分析に基づく新たな視点により、真のイノベーションを創出する、という概念である。創業の過程で性差によるホルモンの違いを無視したことによって発生した健康リスクや、無意識のジェンダーバイアスがビッグデータに含まれていることに気づかずに開発してしまった製品等、性差を無視した研究から多くの誤りが現れている。我が国においても、第5次男女共同参画基本計画（2020年12月25日閣議決定）、及び、第6期科学技術・イノベーション基本計画（2021年3月26日閣議決定）のなかで、ジェンダード・イノベーションの重要性が明記されている。しかし、その概念や意義が、必ずしも日本の学界・産業界に浸透しているとはいえない。

そこで、今年度の中国・四国地区主催の公開シンポジウムのテーマを「ジェンダード・イノベーション」とし、日本学術会議第三部、日本学術会議科学者委員会男女共同参画分科会と協力して開催することとした。さらに、中国・四国地区にある大学において、文部科学省事業の採択プログラムを実施している担当者の方々と相談を重ね、シンポジウムの内容を検討した。研究開発や社会活動のあらゆる場面において、さまざまな視点と角度から検討し取り組むことの重要性を、社会のあらゆる立場の方々（とくに、次代を担う若い世代の方々）と一緒に考えるようなシンポジウムとなることを目指した。

新型コロナウイルス感染症の影響が続く可能性大、と想定して、シンポジウムは完全オンライン（Zoom ウェビナー；同時 YouTube 配信）で開催することとして準備を進めた。

開催日時：令和3年（2021年）8月18日（水）13：30～17：45

参加人数：446名（Zoom への参加登録者（471人）の約8割であり、かなりの高率）

### シンポジウム全体の流れ

総司会会（北川 尚美）

13:40～14:45

この内、14:30～14:45の15分間は質疑応答。

参加者からの質問や意見をQ&Aで受け付け、お答えする。

趣旨説明（渡辺 美代子）

- ・未来は筋力ではなく脳力がこれまで以上に重要な役割を果たすはず。
- ・しかし、能力中心の情報分野でも男性中心の研究開発が進められていることは、現在の世界の課題。

基調講演「自然科学・工学におけるジェンダード・イノベーション」（Prof. Londa Schiebinger）

- ・これまで、日本ではジェンダー平等(男女共同参画)に向けて以下の戦略的アプローチがとられてきている。とくにSTEM分野における「女性数の確保と裾野の拡大」、「制度の整備」、女性リーダーの増加
- ・最近、「知識の再構築」(研究に性差分析を適用するGIIにより、科学技術の質の向上を図る。)が欧米を中心に拡大。
- ・GIIは新たな展望を与え、新たな疑問を提起し、研究の新領域を開く。

15:00～16:30

- 講演1 相田 美砂子  
データから見える日本の姿とその未来
- 講演2 森永 康子  
ジェンダーバイアスを生む心のしくみ
- 講演3 平川 正人  
ICTが紡ぎ出すダイバーシティ推進の未来像
- 講演4 石澤 有紀  
薬物有害事象の発現リスクにおける性差分析
- 講演5 片岡 仁美  
性差医療の現状と今後の展望
- 講演6 竹内 都美子  
「自然体」- 人間中心を追求したMX-30開発

- ・日本の現状を、まずは、認識。
- ・どうして、そうなっている？
- ・ICTで、どこに向かう？
- ・性差分析の実例：薬
- ・性差分析の実例：医療
- ・人間中心の開発！

参加者からの質問や意見をQ&Aで受け付ける。

16:40～17:40

パネルディスカッション  
～「他人事」ではなく「自分事」に～  
モデレータ：堀 利栄

- 追加コメント
- 白川 俊之 ・子どもの教育への親の意識
  - 今村 維克 ・大学における取組
  - 高山 弘太郎 ・ICTが農業を変えている

パネリスト：  
渡辺／相田／森永／平川／石澤／片岡／竹内／白川／今村／高山

- ・科学的に違いを認識することによって、さらに研究は進展し、社会は発展する。
- ・若い世代が、その中に積極的に関わる意識をもつようにすることが重要！

参加登録時に、入力フォームの「質問や意見等」欄に33件の入力があり、当日のシンポジウム開催中のQ&A欄へは、74件の投稿があった。これら（計107件）の投稿の中から、

シンポジウムの中での講演者への質問やパネルディスカッションでの質問を取り上げた。

シンポジウム終了後は、アンケート（質問数=19）への回答を求めた。回答者総数は 189 人であり、参加者の 4 割以上であった。アンケート結果の一部を次に示す。

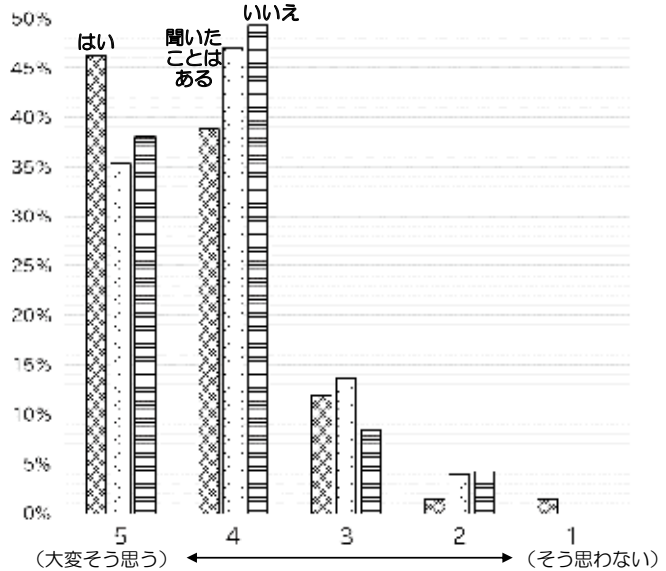
【質問番号 2】  
本シンポジウムに参加する前に、「ジェンダー・イノベーション」という概念をご存知でしたか。



・「はい」を選んだ67人のなかで、5~1を選んだ人数は、それぞれ、31人、26人、8人、1人、1人  
 ・「聞いたことはある」を選んだ51人のなかで、5~1を選んだ人数は、それぞれ、18人、24人、7人、2人、0人  
 ・「いいえ」を選んだ71人のなかで、5~1を選んだ人数は、それぞれ、27人、35人、6人、3人、0人

【質問番号 3】  
本シンポジウムを通じて「ジェンダー・イノベーション」という概念についての理解が深まりましたか？  
(5 (大変そう思う) から 1 (そう思わない) ) の内、1つを選択)

「はい」、「聞いたことはある」、「いいえ」を選択した参加者の中で、5~1を選んだ人数の、それぞれの中での割合



社会の幅広い層の方々にご参加いただいたこと、また、シンポジウムの前は「ジェンダー・イノベーション」をご存知なかった方々にも、このシンポジウムによって理解が深まったと感じていただけたことがわかる。

質問 5 では、シンポジウムのそれぞれのセッションについての意見・感想を自由記入していただいた。その中から抜粋を次に示す。

(質問番号5に記入された意見等の抜粋)

【高校生】男女格差に興味があり、自分が知らなかった分野からジェンダー問題を捉えることができ、とてもためになった。  
 【学部生】性差に関する研究がこれまであまり行われていなかったことに驚きを感じるとともに、ジェンダーの分析・研究がイノベーションにつながることを実感した。これから今回の講演で学んだことをもとにジェンダーの問題を自分事として捉え、現状を少しでも良い方向に変えていけるよう貢献したい。  
 【D生】ジェンダーイノベーションについて、自分の身の回りでは浸透している気が全くしませんが、浸透させる必要のある課題であると強く感じました。最初にジェンダー・イノベーションという概念を押さえたあとで各分野でどのような取り組みが行われているのかを知ることができ勉強になりました。

【質問番号 15】 年齢層

年齢層	回答数
≤19	9
20-29	12
30-39	15
40-49	29
50-59	45
60-69	57
≥70	18
計	185
無回答	4

【質問番号 16】 性別

性別	回答数
男性	61
女性	111
回答しない	10
計	182
無回答	7

【質問番号 17】 職名

職名回答者 (178名) 内訳		
〈学生 26〉	〈教員等 91〉	〈その他 61〉
高校生 7	助教 8	ポスドク 4
学部生 4	講師 1	URA 1
M生 6	准教授 18	大学職員 15
D生 9	教授 60	企業 16
	小中高教員 4	その他 25



シンポジウム全般に関しての感想等の自由記入欄（質問 19）には、多くの参加者が率直なご意見を記入してくださいました。その中から、抜粋を次に示す。

（質問番号19に記入された意見等の抜粋）

- 〔高校生〕内容は難しく、わからない点もありましたが、自分の知識をもっと広げ今後さらにジェンダード・イノベーションについて理解できるようにして、少しでも周りの人にも広げられるよう勉学に励みます。
- 〔高校生〕漠然とジェンダーに関することに興味があったのですが、今回のシンポジウムで複雑なうちの一部を知ることができ、理解が深まったと思います。ジェンダード・イノベーションについて学んだことを日常の中で意識してみたいです。ありがとうございました。
- 〔学部生〕色々な分野の方の話を幅広く聞くことができ新鮮でした。ありがとうございます。
- 〔D生〕オンライン開催の利点があるので、今後も継続して開催していただけると嬉しいです。
- 〔D生〕様々な方面の研究・報告を聞く機会が得られ、有意義でした。
- 〔D生〕まだこのようなジェンダード・イノベーションの考え方について、知らない、気がつかない人々のために、またこのようなシンポジウムの開催を望みます。
- 〔D生〕人間がsexやgenderを身体に有しているため見過ごされていたことに切り込んでおり視野が広がった。気づいていない人がもっと参加していけたらいいなと思いました。
- 〔D生〕研究を幅広くとらえて理工系を中心にジェンダーを科学的に捉え、ジェンダーがどのように変わればよいかについて発表がなされたと思います。できれば、今後はさらに深く掘り下げた研究成果の発信や、人文系・思想に関するジェンダード・イノベーションもお願いいたします。
- 〔ポスドク〕否定的な意見（ジェンダーとイノベーションは関係がないのでは、など）の質問もきちんと取り上げていてよかったと思いました。職場でこのような意見に出会うことが多いので、どのように回答すると良いかの参考になりました。
- 〔高校教諭〕約40名の生徒と視聴させていただきました。大変よい機会を持つことができました。
- 〔企業〕データを示してのジェンダーに関連する取組みや社会的背景について知るよい機会となった。より良い社会を実現するために、自分にできることを考えて行きたい。
- 〔企業〕日々社会の考え方や要望が変化しますので、継続して開催をお願い致します。
- 〔大学職員〕これまでではこういった機会があっても足を運ぶ時間がなかったり、躊躇したり等がありましたが、オンラインが発達したことで身近に参加の機会が設けられて嬉しいです。今後、コロナ禍が解消され対面の機会が増えた場合でもハイブリッドで開催をご検討いただけると幸いです。
- 〔助教〕思ってもみなかった様々な分野でもジェンダード・イノベーションの取組みがあり、またいろいろな取り組みについての意見を聞くことができとてもよかったです。このようなシンポジウムがあればまた参加したいと思います。
- 〔助教〕前半の議論のところで、ジェンダード・イノベーションにおいては、ジェンダー平等の議論をすることに主眼があるのではなく、多様性がどのように新たな考えを生み出すのか（how culture influence ideas）が焦点になる、ということについて話されていたことが印象的でした。同じ対象に対しても、それと向き合う人の立場や経験によって異なる理解の仕方があることについては、私も同じ考えでいます。今利用できる情報についてのジェンダーの偏りについても興味関心をもちました。その情報を用いて現状が把握できるようになっていくことを期待したいと思いました。
- 〔准教授〕「女性！女性！」となるのかなと少し距離を取りつつ申し込みをしたというのが正直なところでしたが、そんなことは全くなく、渡辺美代子先生の男女混ざったグループで出願された特許の経済効果など、自身の周辺の男性社会の中でしか生きておられない男性教授達が聴くべきだと思う内容満載でとても良いシンポジウムでした。ありがとうございました。
- 〔教授〕重要性はわかるとはいえ、これまで「男女共同参画」という名の下でのファッショ的言動に辟易とすることが多かったが、このジェンダード・イノベーションという新しい発想がより深く浸透して性差をより正しく理解して相互に尊重する社会が築けると良いと思った。今後は、そのためにジェンダード・イノベーションがどんな意味を持つかについて、もう少し踏み込んだ議論を期待したい。
- 〔教授〕日本学術会議の活動を知る機会になった。今期、連携会員に加えていただいている。勉強になった。
- 〔退職教員〕学術会議の公開シンポジウムは、任命拒否事件以来、意識して参加しています。これからも、いろいろなテーマのものに参加します。本日のシンポジウムについては、参加できてうれしく思います。

シンポジウムの詳細と基調講演の動画（日本語字幕付）は、次のサイトで公開している。

ぜひ、アクセスしてご覧いただきたい。<https://www.hiroshima-u.ac.jp/news/65559>

第 25 期会員・連携会員一覧 (中国・四国地区)

(凡例)

○: 会員

□: 運営協議会委員

(令和4年2月現在)

会員・連携会員数 112名(女性31名、男性81名)

【鳥取県】6名(女性0名、男性6名)

Table with 4 columns: 氏名, 専門分野, 所属・職名, 任期. Lists members from Tottori Prefecture.

【島根県】6名(女性2名、男性4名)

Table with 4 columns: 氏名, 専門分野, 所属・職名, 任期. Lists members from Shimane Prefecture.

【岡山県】20名(女性5名、男性15名)

Table with 4 columns: 氏名, 専門分野, 所属・職名, 任期. Lists members from Okayama Prefecture.

【広島県】43名(女性14名、男性29名)

Table with 4 columns: 氏名, 専門分野, 所属・職名, 任期. Lists members from Hiroshima Prefecture.

## 【広島県の続き】

氏名	専門分野	所属・職名	任期	
茶山 一彰	臨床医学	広島大学大学院大学院医系科学研究科共同研究講座教授	24-25期	
都留 稔了	化学	広島大学大学院先進理工系科学研究科教授	24-25期	
富永 依里子	電気電子工学	広島大学大学院先進理工系科学研究科准教授	25-26期	
中坪 史典	心理学・教育学	広島大学大学院人間社会科学研究科准教授	24-25期	
藤原 章正	土木工学・建築学	環境学	広島大学大学院先進理工系科学研究科教授	24-25期
前田 香織	情報学	広島市立大学大学院情報科学研究科教授	24-25期	
水羽 信男	史学	広島大学大学院人間社会科学研究科教授	24-25期	
宮谷 真人	心理学・教育学	広島大学理事・副学長	24-25期	
森山 美知子	健康・生活科学	広島大学大学院医系科学研究科教授	25-26期	
森吉 千佳子	化学	物理学	広島大学大学院先進理工系科学研究科教授	24-25期
安井 弥	基礎医学	広島大学名誉教授、医療法人広島健康会・理事長	24-25期	
数田 ひかる	地球惑星科学	化学	広島大学大学院先進理工系科学研究科教授	24-25期
山本 卓	基礎生物学	広島大学大学院統合生命科学研究科教授	25-26期	
山本 陽介	化学	広島大学特任教授	24-25期	
山脇 成人	臨床医学	広島大学特任教授	25-26期	

## 【山口県】 8名(女性2名、男性6名)

氏名	専門分野	所属・職名	任期	
磯谷 明德	経済学	下関市立大学経済学部特命教授	25-26期	
荊木 康臣	農学	食料科学	山口大学大学院創成科学研究科教授	25-26期
岡本 哲治	歯学	基礎医学	東亜大学医療学部長・教授	25-26期
栗原 英見	歯学		下松デンタルアカデミー専門学校 校長	24-25期
鈴木 隆泰	哲学		山口県立大学国際文化学部教授	25-26期
中田 薫	食料科学		国立研究開発法人水産研究・教育機構理事	24-25期
林 裕子	基礎医学	経営学	山口大学大学院技術経営研究科教授(特命)	24-25期
藤澤 健太	物理学		山口大学時間学研究所長・教授	25-26期

## 【徳島県】 12名(女性1名、男性11名)

氏名	専門分野	所属・職名	任期	
石丸 直澄	歯学	徳島大学大学院医歯薬学研究所教授	24-25期	
○市川 哲雄	歯学	徳島大学大学院医歯薬学研究所教授	24-25期	
大久保 徹也	史学	徳島文理大学文学部教授	25-26期	
香美 祥二	臨床医学	基礎医学	徳島大学病院病院長、医学部小児科教授	24-25期
片桐 豊雅	基礎医学		徳島大学先端酵素学研究所長・教授・徳島大学副理事	25-26期
菊地 哲朗	基礎医学	食料科学	大塚製薬株式会社医薬品事業部シニアフェロー(研究部門担当)	24-25期
菅根 三郎	臨床医学		徳島市病院局病院事業管理者	24-25期
中村 浩一	材料工学		徳島大学大学院社会産業理工学研究部理工学域教授	25-26期
西岡 安彦	臨床医学		徳島大学大学院医歯薬学研究所呼吸器・膠原病内科学分野教授	24-25期
姫野 誠一郎	薬学	健康・生活科学	昭和大学薬学部客員教授	24-25期
松山 美和	歯学		徳島大学大学院医歯薬学研究所教授	24-25期
安友 康二	基礎医学	臨床医学	徳島大学大学院医歯薬学研究所教授	24-25期

## 【香川県】 2名(男性2名)

氏名	専門分野	所属・職名	任期	
堤 英敬	政治学		香川大学法学部教授	24-25期
笠 潤平	物理学	心理学・教育学	香川大学教育学部教授	25-26期

## 【愛媛県】 6名(女性4名、男性2名)

氏名	専門分野	所属・職名	任期	
井口 梓	地域研究		愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント学科准教授	25-26期
片岡 圭子	農学		愛媛大学農学研究科教授	25-26期
高橋 憲子	食料科学		愛媛大学大学院農学研究科准教授	25-26期
内藤 俊雄	化学		愛媛大学大学院理工学研究科環境機能科学専攻教授	25-26期
○仁科 弘重	農学	食料科学	愛媛大学学長	24-25期
○堀 利栄	地球惑星科学		愛媛大学副学長・大学院理工学研究科教授	25-26期

## 【高知県】 9名(女性3名、男性6名)

氏名	専門分野	所属・職名	任期	
岩田 誠	情報学		高知工科大学教授	24-25期
宇高 恵子	基礎医学		高知大学医学部教授	25-26期
枝重 圭祐	食料科学		高知大学農林海洋科学部教授	24-25期
緒方 賢一	法学		高知大学教育研究部人文社会科学系教授	25-26期
神原 咲子	健康・生活科学		高知県立大学大学院看護学研究科教授	25-26期
小島 優子	化学		高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門准教授	25-26期
西條 辰義	経済学	環境学	高知工科大学フューチャー・デザイン研究所長/総合地球環境学研究所特任教授	25-26期
中川 善典	環境学	土木工学・建築学	高知工科大学経済・マネジメント学群准教授	25-26期
那須 清吾	総合工学	土木工学・建築学	高知工科大学学長特別補佐	24-25期

## § 会員・連携会員の登録事項変更手続のご案内 §

登録事項(住所、所属・職名等)に変更がございましたら、日本学術会議中国・四国地区会議事務局にご連絡いただきますようお願いいたします。

E-mail: [gakujutu-project@office.hiroshima-u.ac.jp](mailto:gakujutu-project@office.hiroshima-u.ac.jp)

## 地区会議事務局からのお知らせ

令和 3 年度日本学術会議中国・四国地区会議事業報告

事業名	期日(時期)	場所	事業内容
日本学術会議公開シンポジウム	8月18日(水)	広島大学(東広島市)を会場としてオンライン開催	【テーマ】 「ジェンダード・イノベーション (Gendered Innovations) ～一人ひとりが主役の研究開発が新しい未来を拓く～」
第1回地区会議運営協議会	12月10日(金)	オンライン開催	【協議事項】 ①令和4年度公開学術講演会について ②令和3年度地区ニュース(No.53)について ③地区会議の動向(「学術の動向」)について
地区ニュースの発行(No.53)	3月		中国・四国地区の日本学術会議会員・連携会員及び教育研究機関等へ配布
第2回地区会議運営協議会	3月11日(金)	オンライン開催	【協議事項】 ①令和3年度事業報告及び令和4年度事業計画について ②令和4年度公開学術講演会について ③地区会議の動向(「学術の動向」)について

### 原稿募集

地区ニュースは科学者の方々と日本学術会議中国・四国地区会議との連繫を図ることを主な目的としております。

日本学術会議あるいは教育、研究、学術等に関する率直なご意見、ご希望等をお寄せくださいますようお願い致します。

### お願い

回覧等により、多くの方々に読んで頂きますよう、ご配慮願います。

日本学術会議中国・四国地区会議事務局  
〒739-8511 東広島市鏡山一丁目3番2号  
(広島大学 学術・社会連携室 学術・社会連携部)  
TEL: 082-424-4497 FAX: 082-424-6189  
E-mail: gakujuu-project@office.hiroshima-u.ac.jp

日本学術会議地区会議(中国・四国地区会議)

[https://www.hiroshima-u.ac.jp/research/science\\_council\\_of\\_japan](https://www.hiroshima-u.ac.jp/research/science_council_of_japan)